



ぼくらは町の アドベンチャー

6月21日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

6月21日「ぼくらは町のアドベンチャー」

アル・カポネか！と言うのが彼の口癖だった。

どういう意味なのかは、よくわからない。悪の巨魁、という意味で言っているようにも聞こえるし、親分肌、くらいのニュアンスなのかと思う時もある。単に残虐非道な振る舞いをさせているようにも感じる。ふと思いついて尋ねてみたら、やっぱり映画『アンタッチャブル』の中のワンシーンが彼が思うアル・カポネのイメージの元になっていた。ロバート・デ・ニー口演じるアル・カポネが野球のバットを振り回して部下の幹部を肅正するあのシーンだ。

けれど『アンタッチャブル』がアル・カポネのイメージの全てなのかというと必ずしもそうではないらしく、要するに彼、エイスケこと北島永輔の中でごく個人的に醸成されたアル・カポネのイメージに合っていたら何でも「アル・カポネか！」となるようだ。ひよっとするとそれは万能のメタファーで、トランプでいえばジョーカーみたいなものなのかもしれない。要するに「すごい」「過剰だ」「とんでもない」というような時ならいつでも使えるということだ。こういうまとめ方をすると彼は嫌がるだろうが。

だから、わたしがエイスケにイルミネーション長屋の話をした時に、「アル・カポネか！」と彼が言わなかったことがひどく意外だった。わたしはイルミネーション長屋の話をしてながら、当然彼の口から「アル・カポネか！」という突っ込みが出てくるものと想定しており、その突っ込みの間合いまで予期していた。それだけに、話し終えた後に何だか奇妙な間があいてしまった。突っ込みが入るべき時間の分、変な空白の一瞬ができてしまったのだ。これがいわゆる間が抜けた状態である。

だから恐らくわたしは、あれ？ 言わないの？ というような表情をしてしまったのだろう。「ん？」と彼が言った。「どした？」
「いや」わたしは気を取り直して話に戻った。「というわけで、次の取材にどうかと思うんだ」
「『ぼくらは町のアドベンチャー』の？」
エイスケがダサイコーナータイトルを言った。

ぼくらは町のアドベンチャー。

それは、エイスケとわたしが町の冒険家だという意味では全くない。見方によってはそう言えなくもないけれど、心からそう思っているわけではない。少なくともわたしは、心から「ぼくらは町の冒険家だ」と思い込んでいるわけではない。ここは大事なところなので何度でも言っておく。それは違う。『ぼくらは町のアドベンチャー』とは、我々が共同で編集しているウェブマガジンのコーナーの名称だ。決めたのは編集長のエイスケで、発行人のわたしはそれをやめさせ

るために代案をいくつも出した。しかしこれに決まってしまった。

ダサいだろう？ ダサくないかい？ 「ぼくらは」で始まるのもどうかと思うし、「町の」という小物感もいただけない。おまけに「ぼくらは」と来たら「アドベンチャー」で受けないと変だとわたしは思う。わたしはそう思うし、そう主張もした。アドベンチャーでは「冒険家」ではなく「冒険」になってしまう。「ぼくらは町の冒険」では意味がわからない。ダサい上に間違っている。

ところがどうしたことか、これが人気コーナーになってしまっている。『ぼくらは町のアドベンチャー』が始まる前は月間200人くらいしか訪れないサイトだったのだが、コーナー開始後訪問者数がうなぎのぼりになって、連載開始から半年経った今、このコーナーだけで月間のべ10万人が訪れるようになっている。下手な雑誌よりはるかに読まれているのだ。

「イルミネーション長屋ねえ」

エイスケは唸った。あまり賛成できないという反応だ。なぜ賛成できないのだろうか？ これまた意外でわたしは驚いた。何から何までエイスケ好みの物件だと思っていたからだ。よく年末年始に家をイルミネーションで飾り立てる人がいる。そういう家が何軒も建ち並ぶあたりがイルミネーション・ストリートなんて呼ばれてマスコミに取り上げられて、それを見にわざわざドライブして訪れる人が出てきたりすることもある。ほとんど毎年恒例の観光地のようにになっている場所もある。

でもわたしが話したイルミネーション長屋はそういうものとは一線を画している。まずイルミネーションの質が違う。ホームセンターかなにかで買い付けてきた電気代を食うばかりの電球とコードの塊とは全く出来が違う。電球をLEDにしようが何にしようが、いわゆるクリスマスイルミネーションがせっせと電気を食いまくることに違いはない。その量が多いか少ないかの差はあるだろう。けれどそれをつけていない時に比べれば明らかに余分に電気を食いまくっている。そのことには間違いない。ところがイルミネーション長屋は違う。全然違う。電気なんてこれっぽっちも食わない。これだけでも奇跡である。「え、どうして？」である。理由を知りたがらない人がいたらお目にかかりたい。記事にすればヒット間違いなしだ。

それだけではない。

長屋と聞くと我々はついつい熊さんや八つあんの住むような長屋を思い浮かべる。あるいはそこから連想されて、同じようなこじんまりした住居が軒を連ねた、というよりぴったり身を寄せ合いひとつの建物と化した集合住宅などを思い浮かべる。それが木でできていようとコンクリートでできていようと、それらがひしと身を寄せ合った情景を思い浮かべる。ところがイルミネ

ーション長屋は違う。これはもう実際にその目で見ない限り絶対に理解できないのだが、およそ長屋という言葉のイメージからかけ離れている。

「一軒家じゃん」

というのが、初めて現地をロケハンしたときのカメラマンの第一声だった。カメラマンというのは要するにわたしのガールフレンドなのだが。おまけにカメラマンと言いながら正式なカメラは持っておらず、手持ちのiPhone3GSで写真を撮って加工しているだけなのだが。そんなのでカメラマンが務まるのかというと、それで十分だしいろいろ都合がいいのだ。

まあ、わたしたちのウェブマガジンのコーナー『ぼくらは町のアドベンチャー』のための写真ならそれで全然間に合ってしまう。間に合ってしまうし、取材に訪れた先々の車の中でセックスできるのもわたしたち二人にとって、とても都合がいい。わたしたちは今、のべつまくなしにやりまくりたい、そういう時期なのだ。だからカメラマンに採用した。あ。女だからカメラウーマンか。いまどきはカメラパーソンとか言わなきゃいけないのかな。まあいいか。

いずれにしろ、ロケハンで訪れたイルミネーション長屋の外見は、真四角なコンクリートの塊に過ぎなかった。2階建てで、表面にこれといった凹凸もなく、真四角で、ほとんどサイコロ型と言っている。立方体というやつだ。どの辺の長さも同じ。つまり言い換えればどこにも「長い」ところがないのだ。せめてちょっと横に長いとか、奥行きが長いとかしてくれれば「長屋」感が出てくるのだが、見事なまでに真四角なのだ。

「長くないじゃん」

というのがカメラマン、というか、ガールフレンドの第二声だった。それはまさにわたしが心の中で思っていたことだった。長屋ならどこか長くてあってほしい。

ピンポンとチャイムを鳴らし、インターフォンで用件を伝え、建物内に足を踏み入れて我々は自分の認識が間違っていたことを知り、息をのむことになる。イルミネーション長屋はちゃんと長かった。なんと垂直方向に長かったのだ。目の届かないほど遥か地下に向かって、深い深い堅穴がぽっかりと口をあけていた。その内面は、まばゆいまでの光に輝いていた。堅穴の口径は建物とほぼ同じサイズで、建物に入ってすぐの一階部分はその穴を覗き込める回廊となっていた。案内されてすぐ目の前に頼りない手すりがあり、そのすぐ向こうには足がすくむような深い深い穴がいきなりあるのだ。

すぐ向こう？　すぐ向こうどころか！　建物の反対側の回廊を見て理解したのだが、自分が立っているこの回廊は、堅穴に張り出している。つまり足のすぐ真下には百メートルとも数百メートルとも見当もつかない深い虚空なのだ。自分のごく薄い床板一枚で宙に浮かんでいる。そのことに気づき、わたしは驚愕し、堅穴に吸い込まれそうになる引力に耐え、吐き気を覚え、腰から力が抜けるのを感じ、汚い話だがほとんど失禁しそうになった。ガールフレンドは後で教えてく

れたが本当に少し漏らしてしまっただけ。そのことを話し合いながら興奮したわたしたちは後で車の中で盛り上がるのだが、その話はいまは直接は関係ない。

イルミネーション長屋に関する説明を建物の主から聞いて、ふらふらになってわたしたち二人は事務所兼自宅に戻り、現場で一枚も写真を撮らずに出てきてしまったことに気づいた。そのくらいわたしたちは衝撃を受けていたのだ。ガールフレンドが教えてくれたことには、直後に車の中でセックスしている最中も、セックスを終えて家に向かって運転している途中も、わたしはずっと「アル・カポネか。アル・カポネか」と言い続けていたらしい。

「わたしはアル・カポネじゃないんですけど！って言いたかったね」と彼女は言い、こうわたしに警告した。「今度セックスの最中にアル・カポネかって言ったら一生やらしてあげないからね」

けれど、どうやらその心配はなさそうだ。

わたしからの報告を聞いてエイスケがこう言ったのだ。

「悪い。そんなに気に入ると思わなくて、あれ、埋めちゃったんだ」

「埋めた？」

「埋めた」

「何を？」

「イルミネーション長屋」

その時初めて、わたしはエイスケが、ただのウェブマガジンの編集長ではなかったことを知るのだが、その話はまた別の機会にしよう。

(「イルミネーション長屋」 ordered by 蒼いオオカミ。-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

新作スタート。お題募集中。

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」
をご活用ください。

ぼくらは町のアドベンチャー

<http://p.booklog.jp/book/46469>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46469>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46469>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.